

見発群塚の中期生弥

知る俗習埋葬 貴重な手掛かり

◇田村遺跡最終発掘調査◇

空港進入灯建設に伴う緊急発掘調査が進められていた田村遺跡で十一月二十一日、調査結果が発表されました。それによると、弥生中期の埋葬習俗を知る上で貴重な墓塚群が発見されたこと、また瀬戸内文化との交流を示す、サヌカイト製石器が多数出土するなど、大きな成果となっています。なお今回の発掘で、空港拡張に伴う田村遺跡の発掘調査は、すべて終了したことになります。

場所は、滑走路西側の進入灯建設地で、千四百六平方メートルを発掘。発見された遺構は、弥生期のものでは竪穴住居跡十三棟、土塚墓九基、壺棺墓（つぼかんぼ）一基、溝状遺構三条など。出土遺物は弥生土器八万点、サヌカイト製の石包丁、石鏃（せきぞく）、石槍（せきそう）などのほか、装身具としてガラス小玉や管玉なども発見。中世の遺構としては、掘り立て住居跡四棟、土師質（はじしつ）土器など出土。

見発の貴重を知る習俗の弥生期
となった、溝状遺構



うち弥生期の遺跡は、弥生中期から後期にかけてのもので、住居跡は弥生中期中葉と後期のもの、墓塚群は中期後半のものと考えられています。

弥生後期の五棟の住居跡は、直径八メートルと大型でベツト状遺構を持つもので、さらにこれらの住居と接して、一辺が約四メートルの竪穴の建物跡を発見。これは、中央ピットや壁溝などがあることから、小型の住居と思われる。古墳時代には一般に住居が方形に変化するこ

国府史跡保存会

に参るの墓之の貫

今から千三百年前、土佐の国衛（こくが）が置かれた国府。『土佐日記』の作者・紀貫之が延長八年（九三〇）、国司として都からこの地に来任し、四年の任を勤めたところ。

そんなゆかりの地の国府史跡保存会（乾常美会長）が、比叡山近くの葬立（もたて）山に眠る、貫之の墓を訪ねました。一行は乾常美会長ら二十五人。貫之の帰京にない、十一月十七日夜、船で大阪へ出発。大津市へ向かうバスの中では乾会長が、貫之や土佐日記について講演をしま

とから、その過渡期のものとして注目される発見とのこと。

今回の調査の大きな成果は、遺体の上に石を置いた二基の土塚墓の発見で、当時の埋葬習俗を知る上で貴重な手掛かりになるといえます。うち一基は、一方に高杯などの供献土器を置き、他方には石を密度濃く詰め、中央に遺体を置いたと考えられる墓で、祭祀的要素が強い埋葬方法であることが確認されました。また、これらの土塚墓と同じ方向に、多量の土

した。大津市では、貫之を祭神とする福王子神社を訪ね、その後、葬立山の墓へ。約一メートルの墓には「木工頭紀貫之朝臣之墳」と刻まれ、左側には小さな石仏も建っています。

まず、全員で墓を清掃し、桂浜の五色の玉石を墓の前に敷き詰めました。そして土佐日記ゆかりの菓子と地酒を供え、延暦寺の僧に読経してもらい、千年の昔に思いをはせながら、全員が心を込めて祈りました。乾会長は「念願が果たせてうれ

器や石器を含む溝状遺構もあり、土塚墓と関連して、供献土器を一カ所にまとめて葬った可能性もあり注目されています。出土した石器のうち、石包丁、石鏃、石槍などは、香川県でしかとれないサヌカイト製のものが多く、この時期（弥生中時〜後期）に、瀬戸内文化と深い交流があったことも示されています。



た詰め敷き玉石の五色に、前に墓